

研究目的

近年、人口減少や少子高齢化が進む日本の中で地域への消費の増加、関連産業の振興、新たな雇用創出による地域の活性化といった経済効果を理由に「観光」が注目されている。そこで、本研究では奈良県葛城市における観光の現状と課題を探ることを目的とする。
 葛城市では市の人口の多くを高齢者が占め、若い世代が減り、全体の総人口は減少傾向にあったが住宅所得の支援や子育て支援などに力をいれ、最近では回復傾向にある。葛城市は観光を中心とした地域活性化を模索しているが、観光資源の開発やPR方法等で苦慮している。そこで、葛城市の事例を扱う本研究は、観光を通じた地域活性化に苦慮している地域の先進的事例となり得ると考えられる。
 本研究の分析方法は葛城市で開催するイベントに参加してヒアリング調査やインタビュー調査を行い、地域や企業が抱えている課題の抽出を行う。

研究対象（奈良県葛城市の概要）

日本の人口は2005年をピークに2010年を境に減少をたどっており、国立社会保険・人口問題研究所の調査結果によると2025年には3人に1人は65歳以上であると予想される。このため地域内における消費の減少及び地域経済の停滞が懸念されている。
 日本の訪日外国人旅行者数は2003年では約521万人であったが、2015年には約1973万人と大幅に増加している。このように日本全体で観光客を呼び込もうとする動きがある中で、私たちは、奈良県葛城市における観光を通じた地域活性化に着目し研究している。
 葛城市は自然に囲まれた町で国宝や重要文化財を数多く保管している「當麻寺」、相模のルーツを学べたり相模体験ができたりの「相模館はやせ」など観光資源が数多くある。さらに4月から5月にかけては牡丹、10月頃には紅葉も楽しむことが可能である。しかし、認知度の低さや若年層向けの観光資源の少なさ等問題が山積みであることが現状である。

調査方法・研究方法

- ▶2016年 7月19日 葛城市で現地視察。（観光資源の魅力発見のため）
- ▶2016年 9月27日～10月2日 葛城発信アートFAIR2016でスタッフとして参加。（観光客のニーズを理解するため）
- ▶2016年 11月23日 葛城山麓ウォークに参加&ブースのお手伝いをして参加者にヒアリング調査&アンケート調査を実施。（山麓ウォークの満足度調査を行うため）
- ▶2017年 1月6日、7日 「當麻寺」と「道の駅かつらぎ」の2か所でアンケート調査。（観光客の満足度調査を行うため）

アンケート調査結果

- ・図表3、4は山麓ウォークでのアンケートデータ。 サンプル数 526枚（イベント運営側のアンケートを使用）
- ・図表5、6は1月6日、7日でのアンケートデータ。 サンプル数 98枚（宮城ゼミナール作成のアンケートを使用）

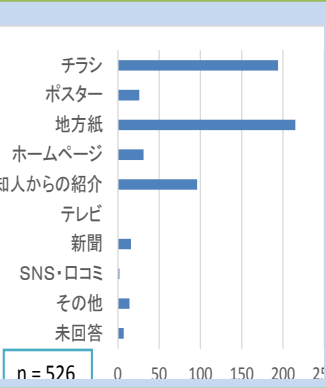


図表1、葛城市の地図



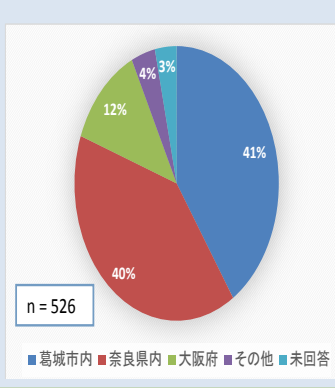
図表2、山麓ウォークでのヒアリング調査時の様子

図表3、イベントを知ったきっかけ

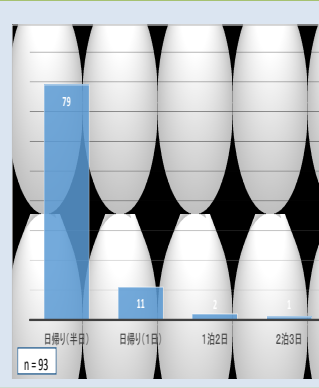


～山麓ウォークでのアンケートデータ～

図表4、イベントに参加された方々の居住地

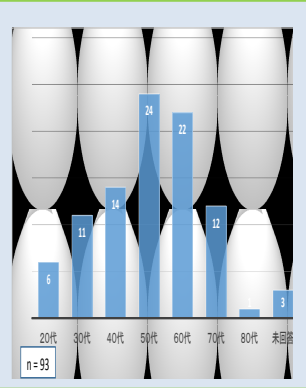


図表5、葛城市での滞在期間



～1月6日、7日でのアンケートデータ～

図表6、葛城市に訪れた観光客の年齢



上記のグラフの結果

- ・図表3よりイベントを知ったきっかけは「広報かつらぎ」や「県民だより」等の地方紙が一番多く、次いでチラシとなっており近隣住民への宣伝はきちんとされていることがグラフを見て読み取れる。また、テレビやSNS等の若年層が目にする事が多いのでPRはきちんとできていなかったのではないかと推測できる。
- ・図表4よりイベントへ参加された方々の多くは葛城市内や奈良県内の方で、大阪府からの参加者を除けば遠方からの参加者は4% (20人)と少数であることがグラフを見て読み取れる。原因として図表3でも述べたPRの方法が考えられる。

上記の2点よりイベントを行う際は既存のPR方法に加え、若年層向けの新しいPR方法を考案しなければ認知度を上げることは難しいと考えられる。

- ・図表5より葛城市での滞在期間は主に日帰りであり、宿泊観光客が少ないことがグラフを見て読み取れる。原因のひとつとして葛城市にある主な宿泊施設が「かつらぎの森」しかないことが考えられる。その他にも長時間観光を楽しむことができる観光資源が少ないことが考えられる。
- ・図表6より葛城市を訪れた観光客の年齢は50代、60代が約半数を占めており、ゆっくりと観光・買い物を楽しみたいと考える年齢層を呼び込んでいることがグラフを見て読み取れる。その反面、子連れ旅行以外での若年層の観光客はごくわずかしかおらず、若年層を呼び込むことに力を入れなければならないことがわかった。認知度が低いことや、交通便の悪さなどが若年層観光客の少ない原因として考えられる。

上記の2点より宿泊施設を増やしたり若年層に対して魅力ある観光資源を提供したり、交通便を良くしなければ認知度向上は難しいと考えられる。

全体の考案

現地調査を行う前に2次データ^{※1}を収集して調査した結果と現地調査で得た情報とで大きく異なっている点がいつか感じられた。2次データで感じた葛城市は認知度の低さが観光客をうまく呼び込めない原因であり、都市部からのアクセスも良く観光資源は多くある市だと考えていた。しかし、現地調査を行うと矛盾点がいくつも存在した。ポスターやチラシなど近隣に居住されている人にはわかりやすく、遠方には居住されている人にはわかりにくいPRの方法。交通便が悪く、車での移動が楽なため車を所有している団体の世代や家族連れは多いが若年層が少ないこと。お寺や公園、山などの観光資源が多く、若年層が何度も訪れたいと感じられる魅力的な観光資源がない等の問題点が明らかになった。

今年度の活動で調査した観光客のほとんどが奈良県民であったが、観光客の満足度は高く観光客の多くがリピーターであることが分かった。よって今抱えている問題点を改善すれば観光客の増加が見込めることが現地調査の結果導き出された。

本研究は、奈良県葛城市における現状や観光を促進する上での課題について、「観光事業者」の視点から調査し導き出された結果から問題の解決策を企画・提案、更には新たな課題の発見等を行う。しかし「観光事業者」の視点から行った調査では観光現象を考察する上で偏りが発生するため「観光客」の視点からも調査することが不可欠である。よって本研究では観光客がどの程度葛城市について認知しているかを確かめるために、今年度中に葛城市以外の観光地で葛城市についての認知度のアンケート調査や、WEBアンケートを行うつもりである。

※1・・・新規に集められるデータではなく、すでに他の目的のために収集された（既存の）データのこと



図表7、関西教育コンソーシアム主催「学生活動成果発表会」での様子

研究成果

2016年9月9日に阪南大学あべのハルカスキャンパスにて開催された関西教育コンソーシアム主催の「学生活動成果発表会」にて2016年度活動報告について発表。

今後の取り組み

- ・観光客のニーズを把握するため、アンケート調査の継続及びイベントへの積極的な参加。
- ・葛城市で行われるイベントの新しいPR方法を企画・提案する。
- ・新たな交通手段としてコミュニティサイクルを葛城市に導入できるように企画・提案する。
- ・新規観光客を獲得するために体験型観光を企画・提案する。
- ・宿泊観光客を獲得するために葛城市の特色にあった宿泊業の民泊を企画・提案する。